



## 米国の生活四十五年間の変化(1)

—障害をもつ人は社会の片隅の存在ではない—

津守 真

今年の夏、メキシコで行われた O M E P 世界理事会出席の途上、私は、米国ミネソタ州ミネアポリス市を訪ねた。ここは、私が四十五年前に大学で二年間勉強していた土地である。最近二十年程の間に三回訪れたが、いずれも二、三日の滞在であった。今回は、私は、障害をもった大人のことについて、もう一度、勉強したいと思い、八日間をここで過ごした。

四十五年前に、私を泊めてくださっていたネルソン氏夫妻はいまなお健在である。



今回も私のために用意された同じ二階の部屋で泊まり、同じキッチンで毎朝、聖書を読んで朝食をとり、おしゃべりしていると、長い歳月はなかったかのような不思議な気持ちになる。ネルソン氏は九十歳で、夫人は八十歳である。私もその当時は二十歳のなかばだった。その頃、弁護士ネルソン氏は毎朝バスで出勤し、私も違う路線バスで大学に通った。ときたま、車でゆかれるときには、私も乗せてもらった。今回は、私の訪問先まで、毎日午前と午後と、ネルソン夫人が運転し、ネルソン氏が後ろの座席に乗って、送り迎えをしてくださった。かつての時のように私は大学までバスで行きたいと思ったが、そのバスは一時間に一、二本しかなく、自動車の運転をしない私には、こういう支援者がなかったら、一週間という短い期間にあちこち訪問することは不可能だった。公共の交通機関が一層不便になったのは、この四十五年間の米国の生活の変化のひとつである。

かつての日に、私がいつもベビーカーをしていた三歳のメアリアンは、この間の年数を数えれば自分がいま何歳かわかるだろうと、ご主人と一緒に笑いながら、自分たちの周囲にいる障害をもつ人たちの話を、飛行場から到着したばかりの昼食の食卓で話題にしてくれた。これから一週間にいろいろの機会に知ったことであるが、いま、米国の社会では、障害をもつ人たちが一般の社会の中に深くまじりつつあることは、予想以上であった。また、問題行動という語の代わりに、チャレンジング・ビヘ



イヴィア (challenging behavior 挑戦行動) という語を普通の人が食卓で使っているのも、予想以上だった。攻撃的な行動は、人的、物的環境が変わると変化するというのも、普通の会話の中で私は何度も聞いた。

ミネソタ州の北、約三〇〇マイルのファリポルトに、四十五年前に、大きな州立居住型施設があった。私は学生のときに、そこに一週間泊まったことがある。現在どうなっているか、私は興味をもっていた。ここに来て直ちに分かったのだが、三五〇〇人いたこの施設は、いま、九十人を残してすべてコミュニティに移っている。そして一九九八年には全部閉鎖される。どのようにしてこのような変化が起こったのか、その人たちはいまだどういう生活をしているのか。これは子どもの教育とも、社会生活とも深くかかわった出来事である。

到着した翌日、私はアウグスバーク大学にスカルヌリス先生を訪ねた。ファックスで何度も通信していたので、沢山の資料をもって私を待っていてくださった。先生は実際に居住型施設から障害をもつ人々をコミュニティに移す仕事をしてこられた方で、まず、ふたつの場所を訪ねるようにと直ちに電話してくださった。ひとつは、ACT (Advocating Change Together 共に変化しようと唱導する団体) という、ピープル・ファースト運動のひとつである。もうひとつは、カポシア (Kaposia) という、施設から出た人たちの生活をコーディネートする会社である。



ピープルファースト運動とは、障害者というラベルを貼る前に、だれでもまず人間であるという主張で、最近十数年に米国全土にひろがった運動である。この運動なしに最近の米国の福祉に関する社会変化を語ることはできない。これはスカルヌリス先生が終始強調されたことだった。先生の編纂された「障害をもつ人のサービスのためのマニュアル」は四分冊から成るが、第一冊は、ヒューマンサービスをする人の認識を人間最優先に切り替えるための訓練にあてられている。

「どんなに重度の障害をもつ人も、自分自身の夢をもち、希望をもち、好きなことと嫌いなことをもっている。彼等は愛されることと愛を与えることと両方を欲している。彼等は他人からのみならず、自分自身からも尊敬されることを欲している。彼等は自分で何かを成し遂げ、自分の能力を使い、生産的な市民となることを欲している。つまり自分の生活の中で挑戦するものをもつことを欲している」

「過去において、また現在ですらもしばしば、障害をもつ人々は他人が助けてあげなければ満たされない要求しかもたない人々なのだと思われてきた。このことは本当ではない。障害をもつ人々は自分の才能を使う機会があまりにも少なく、自分が他人に与える機会があまりにもなかったために、そう思われてきてしまったのだ。この伝統的な考え方を、私たちは自分自身から変えてゆかねばならない。そして他人をも変える努力をせねばならない」



「障害をもつ個人を、障害の産物とみるのではなく、人間として見ることから、この仕事をはじめねばならない」

「一九七五年までは、この分野は暗黒の時代だった。歴史が示すようにラベルは個人を社会から締め出し、苦しみ、無視する。『遅れた子ども』『てんかんの女性』『自閉症の男性』というとき、その人の頭に刻印される語は遅滞であり、てんかんであり、自閉症である。人々は障害という語を記憶して、その人、市民、子どもを見ようとしていない。人間が第一であって、障害は第二であることを忘れてしまふ」

スカルヌリス先生は別れ際に、制度は重要だが、個人個人のことを考えて環境をつくるのが根本であることを力説された。

今回の米国旅行では、この分野でとくに四十五年間の社会変化に驚いたが、人間を第一に考えることが、この分野の変化の動力になっていることを知った。

その日の午後四時から、ミネアポリス市に隣接するセントポール市にある公共団体のビルの一室で、ACCTの会合があり、ネルソン氏夫妻に送られて訪問した。障害をもつ人八人程が会合をしていた。会長は車椅子に乗ったエネルギーな男性で、婦人セクレタリのK女史が専任で全体の世話をしていた。その日の会合では、数年前までフェアポートなどの居住型施設にいた人たちが大半を占めていた。通常の会合では、住宅、仕事、レクリエーション、学校のことなど、障害をもつ人たちが日々直面



している問題が話題になるが、この日は私が参加したので、いかに施設の生活が嫌だったか、いまは町の中に暮らして幸せかを、その人たちが次々に語ってくれた。障害をもつ人自身が自分のことを語ること、また、ことばを話せない人に代わって語ること、そのための訓練の場を提供することもこの会の目的のひとつである。障害をもつ人と障害をもたない人との区別をなくす運動だから、この会合にはもちろんだれでもが参加する。K女史は、長く障害をもつ人たちの仕事をしてこられた人であるが、優しく前進的にリードしておられる姿は印象的だった。

二日目にここを訪問したときには、ファリボルトの施設にいた人たちが、その閉鎖の過程を示したスライドやビデオを用意して見せてくれた。一八七九年に設立された州立施設であるファリボルトが、何万にも及ぶ障害をもつ人々をコミュニティから排除して施設に収容し、多くの人がそこで死に、墓地には番号だけで名前もなく、人間の権利を侵害していたことに対し、一九九六年一月十二日に、州議会は正式に謝罪文を出した。「発達の障害をもつ故に自分の意志によるのでなく州立施設にいれられていたすべての人々に対して、公的に謝罪することを決議する」という前文からはじまる二ページにわたるその文書は、悲痛ですらある。そして、この歴史を反省し、将来において、すべての障害をもつミネソタ州住人が援助を求めるときには、必要とする援助を着実に受けられるようにすると結んでいる。



ミッドウエストと呼ばれる米国のこの地方は、南北戦争の時代、南部から逃げてくる黒人を保護する進歩的な州として知られていた。四十五年前に私がここにいたとき、人種偏見と戦う一般市民の精神的風土に感心させられていた。いま、障害をもつ人々へのサービスについて、このような変化を遂げつつあるのを眼前に見て、私は再び驚いている。国土の広さも、社会の歴史も違う日本で、同じやり方が適合するとは言えないだろう。だからと言って、同じままで継続してよいとは言えない。人間最優先の考えは、日本の社会が必要としているものである。教育と福祉の仕事をする者は、思い切ってそこに立って、人間関係と環境を変える努力を必要としている。

翌日、私は、障害をもつ人とコミュニティとを結び付けるコーディネーターの仕事をしている「カボシア」を訪ねた。「カボシア」とは、アメリカインディアンの語で、「一歩前進」という意味である。

OME Pでも、十年前よりも一層、幼児保育の中に障害をもつ子どもが組み込まれるのが当然になってきている。これは世界中の動向である。機関紙OME Pジャーナルでは、再来年にはこの問題が特集される。